薬と健康

公益社団法人 日本薬剤師会理事 松浦 正佳

副作用

情報提供文書や外箱に目を通す

薬を使用する目的は「病気を治療する」「つらい症状を改善する」こと。一方、正しく使っていても、「副作用」を起こすことがあります。例えば、痛み止めを続けて飲んで胃が痛くなった、花粉症の薬で眠くなったなどは、薬による副作用と考えてよいでしょう。また、体質との相性により、じんましん症状などが起きるアレルギー反応も代表的な薬のリスクです。

副作用は、全ての人に起きるわけでも、必ず起こるわけでもありません。薬は開発段階でさまざまな試験が繰り返され、有効性がリスクを上回ることが確認されています。一方、副作用が起きてしまう確率はゼロではなく、その症状には個人差もあります。

万が一の大きなリスクを避けるには、副作用に初期の段階で気付き、速やかに対応することが大切です。薬を使用している間、特に注意すべき副作用の初期症状に関する情報は、処方薬と一緒に手渡される情報提供文書、市販薬の外箱や添付文書に記載されています。ぜひ、目を通していただき、分からないことや気になることがあれば薬剤師に早めにご相談ください。

また、今までに薬でアレルギー症状を起こしたことがある人は、同じ（類似の）薬を使用してしまうと、アナフィラキシーなど、より重篤（じゅうとく）な健康被害につながってしまう可能性もあります。薬の名前や見た目が違っても成分は同じということがありますので、必ず医師や薬剤師にその旨（むね）を伝えましょう。

確実に薬のリスクからご自身を守るため、副作用を起こした薬をお薬手帳に記載することも重要です。薬剤師に依頼すれば、より詳しい情報を記載してもらうことができますので、お気軽にご相談ください。